

学長からのメッセージ

新しい年を迎えて、卒業生へのメッセージ

‘gnothi seauton’「汝自らを知れ」。ギリシャに伝わるこの箴言は様々に解釈されてきた。例えば、自らの分を知れ、無知を自覚せよ、魂のありようを知れ、自らが死すべき者であることを知れ、自らの心の内を吟味せよ、汝のあるところのものになれ、などと。

「自ら」とは何か、そして「知る」とはどういうことかによって、この箴言の解釈は多様にならざるを得ない。自分は自分にとって最も遠い存在である、ともいわれるように「自ら」は必ずしも自明ではない。それは、「知る」についても同様である。自分を「知る」その知り方は他者を「知る」こととは異なるに違いないし、目の前の物を知ること、法則や原理を知ることとは同じではない。

大学教育の特色は、自分というこの謎めいた存在を問いつつ練磨し、同時に「知る」ことの多様な在り方に触れながら、ものの知り方や探究の仕方を学び、試み、新たな知を発見することにある。しかもこの二つは相互に関わり合っている。自らを問うことと知を探究することとは根底的には相関しているのである。省みれば私たちは自らが多面的に存在していることに気付く。それと同様に、私たちを取り巻く世界も探究の仕方によって異なる姿で現れる。その多様な姿を見極めようと試みるのが学問を志す者に求められる基本的な姿勢なのである。そして、自らを問い練磨し知を探究することを目指すこの姿勢は、校歌にも謳われている本学の伝統でもある。

みがかずば 玉もかがみも なにかせん
学びの道も かくこそありけれ

著しく流動的で見通しのきかない現在の社会的、国際的状況を考えると、自らの在り様を深く意識し、ものごとを多面的かつ多様に理解する知的な能力はこのほか重要である。本学独自の教育システムである「文理融合リベ

ラルアート教育」と「複数プログラム選択履修制度」による専門教育、そして「女性リーダー育成プログラム」は、そうした知的な能力を身につけることを意図して設計されている。

まず、「文理融合リベラルアート教育」は、21世紀の学問のあり方を探究する試みでもあり、そこでは伝統的な専門の別を前提とせず、身の回りに課題を発見し、解決の手法を学び検証する。具体的な事象それ自体には当然のことながら文系理系という区別はなく、様々な要素が内包されているのであり、同じ事象が、アプローチの仕方によって姿を異にして現れる。したがって、物事をできるだけ正しく理解するには多様な見方が必要なのであり、それに気付くことが学問への第一歩となる。

そして、このリベラルアート教育を通していわば複眼的な視点を身に付けた後の専門の習得方法が「複数プログラム選択履修制度」である。この制度では専門的知識の履修方法に三つの選択肢があり、一つは、主たる専門をより深く学ぶ方法、他は、特定の専門に加えて、関連する他の専門を履修するか、あるいは複合的に他の領域を学ぶ方法である。この制度は、学生の主体性を尊重しているだけでなく、新たなテーマや新たな専門分野をも開拓する学生の創造力と自律性を前提としている。

さらに、こうした学士課程の教育システムに加え、優れた学生がこれまで以上に社会で活躍することを期待した女性リーダー育成プログラムも進行中である。

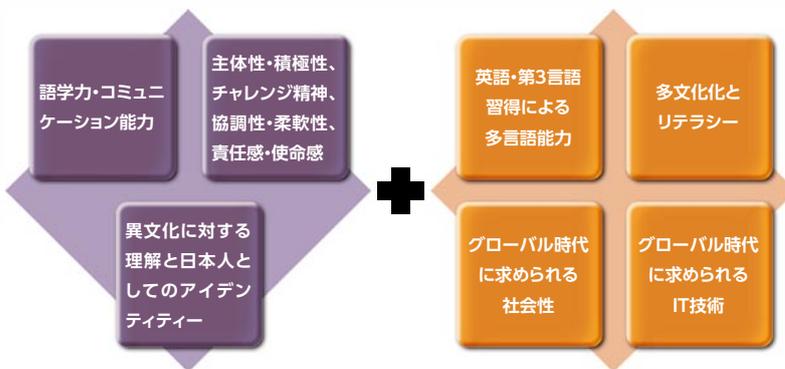
たとえば、「グローバル女性リーダー育成」の取り組みは、2012年度に文部科学省の「グローバル人材育成推進事業」として採択された教育プログラムであり、国際性の強化を目指すこの事業の実施に当たって、本学では、語学力の強化に加えて、とくに文化の多様性を実践的に理解する力の涵養や専門的知見を発信する能力の訓練を重視



写真：お茶大写真部提供

している。この場合にも、本学の教育方針が有効に作用するはずである。

「お茶大型グローバル人材像」



「グローバル人材育成推進会議」の人材像

また、このプログラムは、国立の女子大学の使命としてこれまで実施してきた「女性リーダー育成プログラム」の国際化バージョンでもある。

本学のリーダー教育では、その理念を「心遣い」「知性」「しなやかさ」とした。

リーダーという存在が組織の先頭に立って権力を行使

するだけの存在ではなく、自らが属する場を担い機動させ、新しい価値をも創造しようとする存在であるとすれば、

常に自らを問い、省み、そして他者に眼差しを向け理解しようと努める「心遣い」は不可欠である。

また、高等教育機関に学ぶ者としては、確かな専門的知識を習得し「知性」を高める努力が必須である。ただしその知は、課題解決の道を探る確かな知であると同時に限界をも意識した知でなくてはならない。

先の東日本大震災とそれに伴う原子力発電所の事故は、私たちに科学的知の限界を強く認識させた。知を駆使し事態に対処するだけでなく、そこには避けられない限界があることも私たちは意識していなくてはならない。

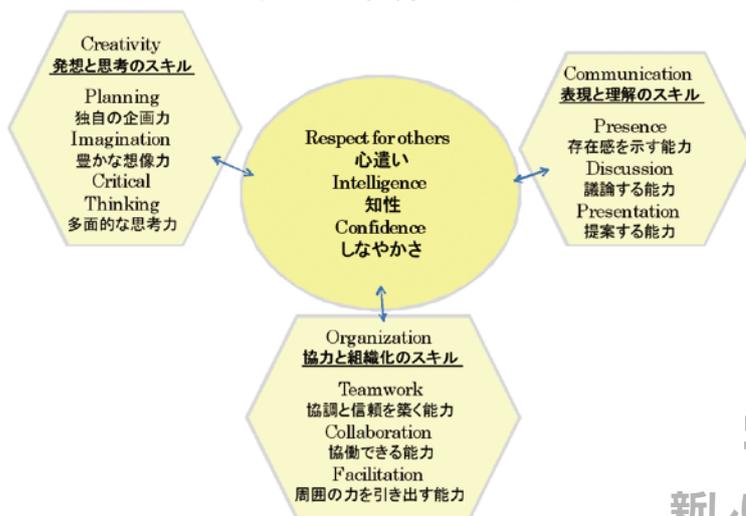
そして、この意識こそむしろ課題に対する柔軟な対応と新たな知への挑戦を可能にする。このような知を携えて、それを力とし、自信をもって物事に柔軟に対処する力が「しなやかさ」である。

他のものに心に向け、自らの知を力とし、これを基盤に自信をもって物事に適切に対応できる柔軟性を培うことが本学のリーダー育成の要であり、その基盤は自らを磨き高めることにある。そしてそれはまた「自らを知ること」でもある。

この春、この学び舎から社会へと飛び立つ卒業生、修了生には、このように特色ある本学の教育によって培われた自らの知を誇りとし、自信をもって、それぞれの力を社会で開花させ、自らの未来と社会を輝かせてほしいと願い、心からのエールを送ります。

2013年1月
学長 羽入 佐和子

「リーダー教育の理念」



この春、この学び舎から社会へと飛び立つ卒業生、修了生には、このように特色ある本学の教育によって培われた自らの知を誇りとし、自信をもって、それぞれの力を社会で開花させ、自らの未来と社会を輝かせてほしいと願い、心からのエールを送ります。

2013年1月
学長 羽入 佐和子

学長からのメッセージ

新しい年を迎えて、卒業生へのメッセージ